

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02691

研究課題名(和文)チベット・ビルマ語派ルイ語群の未記述方言調査によるルイ祖語の研究

研究課題名(英文) A study of Proto-Luish based on undescribed dialects of Luish languages of Tibeto-Burman

研究代表者

藤原 敬介 (HUZIWARA, Keisuke)

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：00569105

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：チベット・ビルマ語派ルイ語群に属するバングラデシュのチャック語、ビルマのカドゥー語とガナン語等について、未記述方言の調査をおこなった。チャック語については、ビルマ側ではなされる方言の話者の協力をえて、以前出版したCak-English-Bangla dictionaryにビルマ語訳をつける作業を中心におこなった。カドゥー語とガナン語については、未記述方言について基礎語彙調査をおこなった。調査の結果、おなじ言語でも世代差や地域差によって、どのような部分が変化しやすいかといった情報がさら蓄積された。そして、ルイ祖語についてさらに同源形式を同定することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

チベット・ビルマ語派ルイ語群に属する言語は話者がすくなく、ほとんど記述されていない方言が多数存在する。話者がいなくなる前に、できるだけおおくの方言を記述することは重要な仕事である。方言の中に、すでにつかわれなくなった語彙や表現がのこっていると同時に、方言を比較することによって、言語がどのように変化していくかがわかるからである。本研究を通じて、チベット・ビルマ語派ルイ語群の諸方言にみられる特徴をより一層あきらかにすることができた。特に、有声阻害音のふるまいが方言分岐にとって重要な役割をはたしていることをあきらかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The undescribed dialects of Cak in Bangladesh and Kadu and Ganan in Burma, which belong to the Luish group of Tibeto-Burman, were surveyed. For the Cak language, with the cooperation of speakers of the dialects spoken in Burma, I mainly worked on the Burmese translation of the previously published Cak-English-Bangla dictionary. The basic vocabulary of undescribed Kadu and Ganan dialects was also surveyed. As a result of the survey, we have accumulated information on what parts of the same language tend to change according to generation and regional differences. And we were able to identify further protoforms for the Luish languages.

研究分野：言語学

キーワード：チベット・ビルマ語派ルイ語群 チャック語 カドゥー語 ガナン語 方言 基礎語彙 音変化

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

応募者は2000年からチャック語(Cak: ISO 639-3 ckh)の研究を開始し、2008年には博士論文でチャック語文法をかきあげ、2015年度中にはチャック語の辞書を刊行する予定があった(辞書は2016年3月に刊行した)。このように、チャック語の共時的な記述研究にはくぎりをつけることができた。

しかし、チャック語が属するチベット・ビルマ語派ルイ語群(Luish group of Tibeto-Burman)の研究は、応募者によるものをのぞけば、世界的にみてもほぼ存在しない。ルイ語群に属する言語としては、チャック語のほかには、インド・マニプル州のチャクパ諸語(アンドロ語(Andro) センマイ語(Sengmai)など)、ビルマ・ザガイン管区(Sagaing Division, Burma)のカドゥー語(Kadu: ISO 639-3 zkd)、ガナン語(Ganan: ISO 639-3 zkn)、ラカイン州のサク語(Sak)などがいられている。このうちチャクパ諸語はすでに母語話者がいない。カドゥー語とガナン語、サク語についても、流暢な話者はそれぞれ1万人以下であると推定される。

応募者は2007年以来、のべ1年以上ビルマに滞在し、ルイ語群の調査研究をつづけてきた。そして2015年までに、チャック語、チャクパ諸語、カドゥー語、ガナン語の資料をもちいて、ルイ祖語に500組ほどの同源形式を提示している。

他方、これまでの調査で、カドゥー語はモーテイツ・カドゥー語(Moteik Kadu)、セッター・カドゥー語(Setto Kadu)、モーラン・カドゥー語(Molang Kadu)、モーカー・カドゥー語(Mokha Kadu)、モークワン・カドゥー語(Mokhwang Kadu)の五種に大別できることをあきらかにした。

そしてカドゥー語諸方言の精査とガナン語の方言分類が重要な課題となってきた。

### 2. 研究の目的

本研究では、バングラデシュとビルマにおいてチベット・ビルマ語派ルイ語群に属するチャック語、サク語、カドゥー語、ガナン語の未記述方言を対象として、基礎語彙調査を中心とした臨地調査をおこなう。具体的にはチャック語ナイキョンチョリ方言(Naikhyongchari)、ビルマ・ラカイン州のサク語諸方言、ビルマ・ザガイン管区のカドゥー語およびガナン語の諸方言が調査対象である。調査にあたっては、ルイ語群の分類基準となる音対応や方言語彙、さらに周辺言語との言語接触の影響に留意する。共時的記述をもとにして、ルイ語群の方言分類を精緻化する。

方言調査を通じて収集される語彙資料をもとに、さらなるルイ祖語形式の同定をめざす。

### 3. 研究の方法

ルイ諸語の方言調査にあたっては、応募者が独自に作成している800語規模の『ルイ語群言語調査票』をもちいる。この調査票は、東京大学の故・服部四郎教授による『基礎語彙調査票』[1957年]を基本とし、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の新谷忠彦名誉教授による『シャン文化圏(ビルマ・タイ・ラオス・中国雲南省にまたがる地域)言語調査票』[2001年]を参考に、調査地域に特有の語彙に配慮したものである。

ルイ諸語の方言調査は基礎語彙収集が中心であるけれども、大阪大学の加藤昌彦准教授による『エクスプレス・ビルマ語』にみられる文法項目と例文を精選した文法調査もおこない、基礎語彙調査だけではわからない文法的特徴の把握につとめる。

ルイ諸語の方言調査の具体的な調査地点としては、チャック語については、バングラデシュではコックスバザール(Cox's Bazar)でバイシャリ方言(Baishari)とナイキョンチョリ方言のチャック話者から資料を収集する。ビルマではラカイン州のミャウウー(Mrauk U)でビルマ側のチャック語(サク語)方言の調査をおこないつつ、Cak-English-Bangla dictionaryのビルマ語訳をおこなう。カドゥー語とガナン語については、ビルマ・ザガイン管区のインドー地方(Indaw)、バマウツ地方(Banmauk)、ピンレーブー地方(Pinlebu)、ホームリン地方(Homalin)で未記述方言調査をおこなう。

### 4. 研究成果

チャック語については、バングラデシュのコックスバザールに6回渡航し、Cak-English-Bangla dictionaryの改訂を中心に作業をおこなった。その過程で、バイシャリ方言とナイキョンチョリ方言の語彙を中心に数百語の語彙を追加することができた。さらに、ビルマ・ラカイン州のミャウウー(Mrauk U)に4回渡航し、Cak-English-Bangla dictionaryにビルマ語訳をつける作業をおこない、ほぼすべての語彙にビルマ語訳をつける作業を終了した。その過程で、バングラデシュ側のチャック語と、ビルマ・ラカイン州のチャック語(サク語)との相違について、よりくわしく把握することができた。そして、バングラデシュ側では顕著ではない世代差による言語の相違が、ビルマ側では、特に発音について、顕著であることがわかった。このほか、近年創出されたチャック文字について、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の高島淳教授に依頼し、LaTeXであつかえるようにしていただいた。その結果、Cak-English-Bangla dictionaryの改訂版では、チャック文字も見出し語として提示する目処がたった。

カドゥー語については、ビルマ・ザガイン管区のインドー地方でモークワン・カドゥー語の東部方言を調査した。そして、他のモークワン・カドゥー語では有声阻害音と無声阻害音が対

立しないにもかかわらず、モークワン・カドゥー語東部方言では対立していることを発見した。さらに、モークワン・カドゥー語東部方言における有声阻害音は、基本的には、祖語における入破音が変化したものであるか、接頭辞が消失した残滓であることをあきらかとした。ザガイン管区のピンレープー地方では、モーラン・カドゥー語とモーカー・カドゥー語の調査をおこなった。そして、一般的なカドゥー語では有声阻害音と無声阻害音が対立しないにもかかわらず、この両方言では対立しているほか、特有の語彙を共有するなど、両者は類似した特徴をもつ方言であるけれども、声調の変化のしかたや一部の語彙・文法について、相違があることもあきらかとした。

ガナン語については、北東部のシュウェージャウン方言 (Shwe Jaung) と北部のナンザー方言 (Nanza) が二大方言であることはわかっていた。これにくわえて、南部のムサー方言 (Musa) やホームリン地方の方言を調査した。その結果、南部方言は語末子音の摩滅がはげしいことがわかった。ホームリン地方の方言については、基本的にはナンザー方言にもっともちかいことがわかった。そして、他方言との比較により、ショウェージャウン方言がもっとも保守的な特徴をのこしていることがはっきりした。このほか、ビルマ・カチン州 (Kachin State) に移住してきたガナン人の方言調査もおこなった。カチン州のガナン人は、移住してから 40 年以下の世代が大半をしめており、まだ移住元の方言と相互理解が可能な状態であることがわかった。今後、移住したひとびとの言語がどのように変化していくかに注目される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 23
2. 論文標題 モークワン・カドゥー語東部方言における有声阻害音	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 83-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.24467/onseikenkyu.23.0_83">https://doi.org/10.24467/onseikenkyu.23.0_83</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 36
2. 論文標題 チャック語会話文資料	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 京都大学言語学研究	6. 最初と最後の頁 93-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.14989/230689">https://doi.org/10.14989/230689</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 17
2. 論文標題 チャック語のことわざとなぞなど	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 印度民俗研究	6. 最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 HUZIWARA Keisuke	4. 巻 10
2. 論文標題 A contrastive study of external adnominal clauses in Japanese and Bangla	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Bengal Studies	6. 最初と最後の頁 358-367
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川上夏林・藤原敬介	4. 巻 10
2. 論文標題 【翻訳】「ドゥニーズ・ベルノー：ピルマの諸言語と知識」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語記述論集	6. 最初と最後の頁 251-270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 35
2. 論文標題 タマン語の系統再考	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 京都大学言語学研究	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 66(1)
2. 論文標題 チャック語の民話「赤歯茎」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 神戸外大論叢	6. 最初と最後の頁 7-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 92
2. 論文標題 チャック語の民話「バカのはなし」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 神戸市外国語大学外国語学研究	6. 最初と最後の頁 49-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 16
2. 論文標題 チャック語のことわざ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 印度民俗研究	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 9
2. 論文標題 マルマ語会話文資料	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語記述論集	6. 最初と最後の頁 65-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原敬介	4. 巻 12
2. 論文標題 モーラン・カドゥー語の民話「金持ちと貧乏人の息子」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語記述論集	6. 最初と最後の頁 161-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 藤原敬介
2. 発表標題 マルマ語の精巧表現
3. 学会等名 日本言語学会第158回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 A preliminary report on the Molang Kadu phonology
3. 学会等名 The 29th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (KFC Hall, Rogoku, Tokyo) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 Elaborate expressions in Marma
3. 学会等名 TaLK (Theoretical Linguistics at Keio) 2019: Myanmar Linguistics, State of the Art
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原敬介
2. 発表標題 パイエン語の言語特徴
3. 学会等名 日本歴史言語学会第9回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 Varieties of Cak dialects
3. 学会等名 第28回東南アジア言語学会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 The autonym of Kadu in Burma and related place names
3. 学会等名 第13回国際ビルマ研究集会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原敬介
2. 発表標題 モークワン・カドゥー語東部方言における有声阻害音
3. 学会等名 第32回日本音声学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 Devising an orthography for the Cak language by using the Cak script
3. 学会等名 第1回アジア言語人類学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原敬介
2. 発表標題 ガナン語における音節未閉鎖音付加
3. 学会等名 日本言語学会第154回大会
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 The addition of final stops in Luic languages
3. 学会等名 The 50th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤原敬介
2. 発表標題 ルイ諸語とボロ・ガロ諸語との声調対応
3. 学会等名 日本歴史言語学会第7回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 On the genetic position of Chakpa within Luish languages
3. 学会等名 The 10th International Conference of North East Indian Linguistics Society (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 In search of the lost meaning: `Chakpa' of Manipur and beyond
3. 学会等名 2nd SuKu Joint Workshop on Human Sustainability (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤原敬介
2. 発表標題 タマン人とその言語
3. 学会等名 2016年度ビルマ研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 HUZIWARA Keisuke
2. 発表標題 On the genetic position of Taman reconsidered
3. 学会等名 The 49th International Conference on the Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考